

(2) いわゆる水切瓦の出土遺跡と様相

軒丸瓦の瓦当面下端部を削って三角状に尖らせたり、突起を付けた特異な形状の古瓦を一般に水切瓦と呼称している。これらの古瓦は、備後北部を中心に出雲・安芸・備中の一部に分布しており、現在までのところこの陰陽を結ぶ地域以外では全く検出されていない。これは、古代の造瓦技術や組織の解明のみならず、初期仏教文化の地方伝播を研究する上で注目すべき遺物といえる。

この特異な形状の瓦を最初に注目し論述されたのは梅原末治氏で、昭和27年のことである。^{註(1)} 以後、近藤正氏や江谷寛氏等によって研究が発表されている。^{註(2)} また、その驥尾に付して筆者も、昭和44年にその様相を整理して発表し、以後も二・三の小文でふれてきた。^{註(3)} ^{註(4)} ところが、その後各地で寺院跡の発掘調査も相次いで行われ、新しい発見もあったのでここで再整理してみたい。

水切瓦出土遺跡 これまでにいわゆる水切のついた瓦を出土した遺跡は10個所で、寺跡8個所、窯跡2個所となる。また、まだ水切のついた部分が検出されていないが、明らかに同系統と思われる瓦を出土した遺跡が2個所あり、今後の調査によっては水切のついた瓦が出土する可能性が大きいので、ここでは一緒にとりあげておきたい。これを県別にみると広島県が9個所で、国別では備後国が7個所、安芸国が2個所である。岡山県は2個所でいずれも備中國にある。島根県は1個所で出雲国である。

次に各遺跡の概略と出土瓦について簡略に紹介してみよう。

1 神門寺境内廃寺—島根県出雲市塩冶町所在。旧出雲国神門郡に属す。平野部に立地し、現浄土宗神門寺の境内に埋もれる。伽藍配置は明らかでないが、心礎と版築された基壇土が確認された。

出土軒丸瓦は3種知られ、複弁文の2種に水切がついている。軒平瓦は明らかでない。詳細は本文参照。

2 寺町廃寺—広島県三次市向江田町寺町所在。旧備後国三谷郡に属す。山間の南に張出した丘陵台地に南面して建立され背後に山を負っている。法起寺式の伽藍配置で、塔跡・金堂跡・回廊跡が検出されている。回廊は講堂の中央に取付く。中門跡・南門跡及び外郭の築地跡は明確にできなかつたが、地形等からみて寺域はほぼ1町四方と想定される。『日本靈異記』所載の三谷寺と推定される。

軒瓦は軒丸瓦が5類8種あるが、軒平瓦は籠で一本の沈線を入れたものが1点確認されている。軒丸瓦は素弁文のもの3種、複弁文のもの3種、素弁と複弁が交互に配された混弁文のもの1種、単弁文のもの1種である。単弁のものは断片のため明らかでないが、そ

の他はすべて水切が付いている。

この他、小金銅仏頭・小塑像仏頭・三彩瓶片等が出土している。

3 上山手廃寺一広島県三次市向江田町上山手所在。旧備後国三谷郡に属す。平野を臨む丘陵の端部に位置し、南面していたものと推定される。金堂跡および講堂跡と推定される遺構が検出されており、法起寺式配置と推定されるが、塔跡が検出されていない。門跡・回廊跡・築地跡も明らかでない。なお、金堂跡は二重基壇と思われる。寺町廃寺の西南約1kmに位置し、山間への入口にあたり、寺町廃寺と関わりのあったことが想定される。

軒丸瓦は複弁文1種のみで、寺町廃寺のF I aと同范と思われ、水切が付いている。軒平瓦は明らかでない。

4 寺戸廃寺一広島県三次市三次町寺戸所在。旧備後国三次郡に属す。平野を臨む低い台地に南面し山を背にしている。昭和44~45年に三次市教育委員会によって発掘調査がなされ、基壇跡等の一部が検出されているが、伽藍配置は明確でない。寺域は1町四方弱と推定されている。

軒丸瓦は複弁文2種で、F Iは寺町廃寺・神門寺廃寺・康徳寺廃寺などと酷似しているが、同范とは思えない。F IIの花弁は弁端が尖り他例とやや異なった形をしている。何れも水切がついており、特にF IIは丸瓦取付部から大きく削って三角状を呈している。やはり軒平瓦は明らかでない。

なお、この他にミニアチュアの鷲尾が出土している。

5 伝神福寺跡一広島県庄原市宮内町隠地所在。旧備後国三上郡に属す。小丘陵の南麓に位置し、礎石が神社に転用されているが未発掘で遺構は明らかでない。『芸藩通志』に神福寺、田間より古瓦を出すと記されている。

軒丸瓦は素弁文と複弁文の2種で、S IIは寺町廃寺に酷似しているが、水切が付いていたかどうかは明らかでない。F類の花弁は他例と類似しているが、中房と外縁が異なっており、水切は付いていない。

6 康徳寺廃寺一広島県世羅郡世羅町寺町所在。旧備後国世羅郡に属す。世羅平野を臨む南面する山麓に位置している。現臨済宗康徳寺の門前にあり礎石も出土しているが、未発掘で遺構は明らかでない。

軒丸瓦は複弁文1種で、やや大振りであるが寺町廃寺F Iに類似している。水切は小さな突起となって付いている。

なお、唐草文軒平瓦と鷲尾が出土したと言われているが明らかでない。

7 大当瓦窯跡一広島県三次市和知町大鳴所在。旧備後国三谷郡に属す。寺町廃寺の背

後を一山越した、北西約1.5kmの西面した低丘陵地に位置している。範囲確認の試掘調査で約10基の窯跡が明らかになった。平窯が検出されているが、登窯の存在も予測される。

出土瓦は、複弁文と素複混弁文の2種で、何れも水切が付いており、寺町廃寺と同范でのその瓦窯跡と考えられる。

なお、鬼瓦と埠も出土している。

8 亀井尻瓦窯跡—広島県庄原市上原町亀井尻所在。旧備後国恵蘇郡に属す。南に張出した丘陵台地の縁端部に位置する。昭和40年に広島大学が発掘調査し平窯が1基明らかになっている。ロストルを有しているが焼成室と燃焼室に段差がなく同一床面である。

出土瓦は、複弁文軒丸瓦で水切が付いている。F Iであるが、使用寺院についてはまだ明らかでない。

なお、付近の丘陵から均整唐草文軒平瓦が1点出土しているが、遺構は明らかでなく寺跡かどうかは不明である。恵蘇郡内に寺跡の存在も予測される。

9 横見廃寺—広島県豊田郡本郷町下北方所在。旧安芸国沼田郡に属す。丘陵の南麓に位置する。昭和46~48年に広島県教育委員会が発掘調査を行い、講堂跡と推定される東方基壇、塔跡と推定される西方基壇、回廊跡・築地跡などを検出している。寺域は約東西100m×南北70mで、西面の特異な配置と想定される。

軒丸瓦は素弁文、単弁文、複弁文、パルメット文、細弁文など7類が明らかになっている。単弁文は大和の檜隈寺や栗原寺と同范品で、明官地廃寺とも同范である。パルメット文は大和法隆寺系のパルメット文と酷似している。これまでに複弁文で水切の付いたものが1点出土している。軒平瓦は重弧文が2種、その他鷗尾・文字瓦なども出土している。

10 明官地廃寺—広島県高田郡吉田町中馬所在。旧安芸国高宮郡に属す。東に張出した緩丘陵地に位置する。昭和59年の試掘調査で、瓦積み基壇が検出された。

軒丸瓦は素弁文、単弁文、素単混弁文がある。単弁文の1種に水切の付いたものが出土した。7弁で子葉の中に綾杉状の毛羽があり、周縁は重圈文である。また、単弁文の1種は横見廃寺、檜隈寺・栗原寺等と同范である。

11 大崎廃寺—岡山県岡山市大崎西の前所在。旧備中国賀夜郡に属す。南に張出した丘陵に囲まれた平地に位置する。未発掘のため遺構は明らかでない。

軒丸瓦は素弁文に細線で複弁文様を描いており、周縁の圈線が下端の水切に沿って尖っている。軒平瓦は不明で、他に鬼瓦が出土している。

12 柏寺廃寺—岡山県総社市南溝手柏寺元所在。旧賀夜郡に属す。平野の中心部、現門満寺の境内に位置する。昭和52~53年に岡山県教育委員会によって発掘調査が行われ、東

西1町×南北1町半の寺域が想定されている。門満寺境内地に塔心礎、礎石等が残存しており、発掘で塔基壇が検出されている。

軒丸瓦は素弁文・複弁文・細弁文で、軒平瓦は籠描き重弧文と無文厚手、均整唐草文及び塙がある。素弁文軒丸瓦は、寺町廃寺S Iと同範のものと周縁の圈線だけ異なると思われるものがある。これらに水切が付いていたかどうかは破片のため明らかでない。

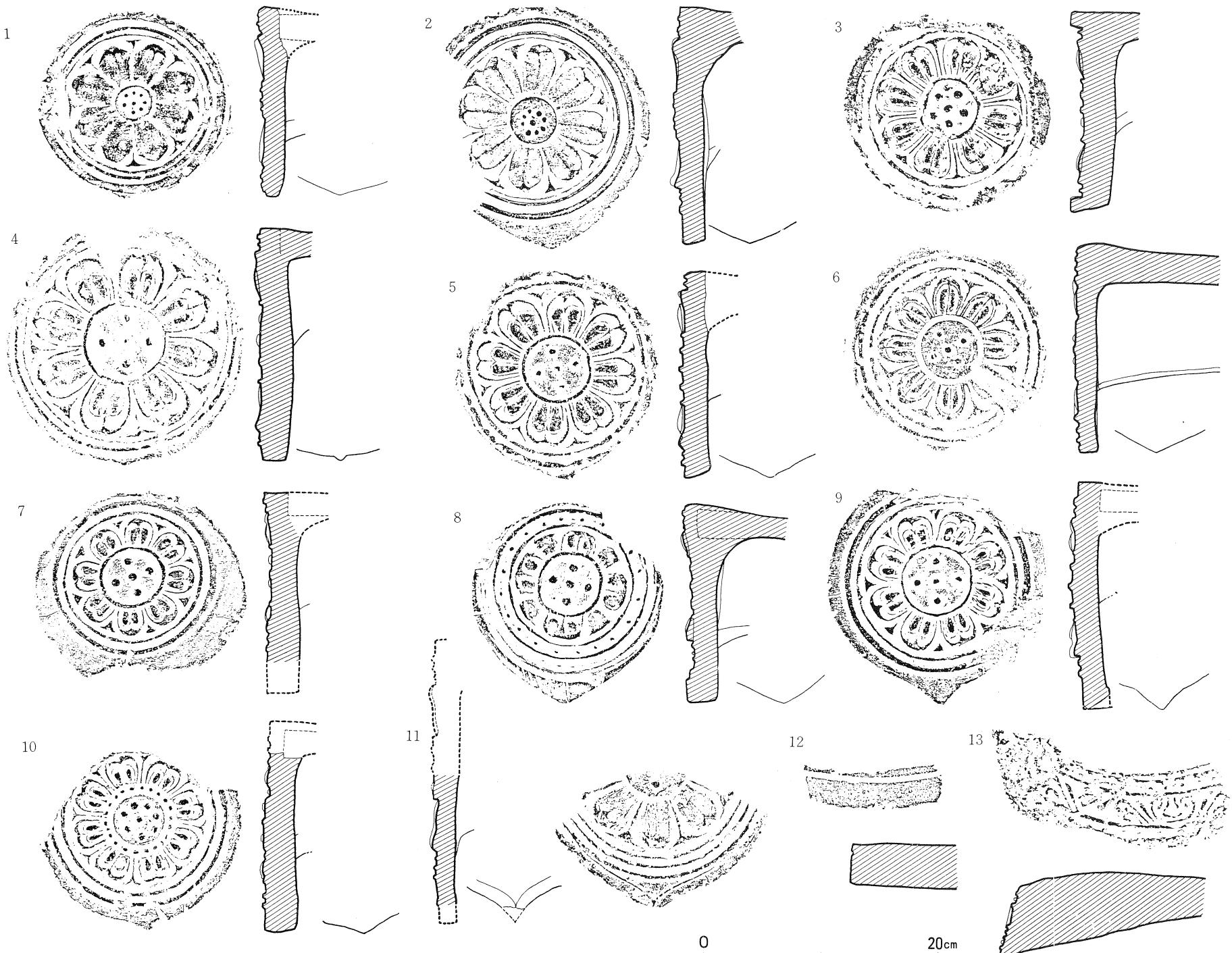
水切瓦の様相 これまでに明らかになっている水切瓦の文様は、素弁文と複弁文が主流で、両者を混合したような素複混弁文もある。最近発見された安芸・明官地廃寺の単弁文を除いて、各文様とも類似したものが多い。特に、周縁部は平縁で2～3重圏の廻るものが多く、明官地廃寺のものがいわゆる山田寺式の高縁に重圏文であると寺町廃寺の混弁文が珠文帯を有するのを除けば、概して平縁重圏文系とでも称すべき様相がみられる。

素弁文類（S）—寺町廃寺の素弁文を標識とすると、花弁の広短なもの（S I）と狭長なもの（S II）に分けられる。8弁で比較的小さい凸中房に、S Iは1+7、S IIは1+4か1+8の小さな蓮子が付いている。周縁は平縁で2重圏である。S Iは栢寺廃寺で周縁が2重圏の同範のものと周縁が1重圏のものが出土しているが、何れも水切が付いていたかどうかは明らかでない。S IIは伝神福寺跡で出土しているが、範型は異なり、水切についても不明である。

大崎廃寺の瓦は一応素弁文（S）として分類しているが、素弁に細凸線で複弁を表現したもので、他の複弁文のように子葉の隆起はないが、複弁文として分類すべきかもしれない。また、周縁の3重圏の他に下端の水切部に沿ってやはり細線で水切の尖りを表現している。文様で水切を表現した唯一の瓦である。

複弁文類（F）—寺町廃寺の複弁文（F I）を標識にすると、8弁の花弁は細い凸線で盛上った子葉を囲んで複弁となっている。中房は大きく幅太の凸圏線内に1+4の大振りの蓮子が入っている。周縁は平縁で2重圏である。花弁の長短によってa・b・cに分けられる。寺町廃寺F I aは同範瓦が上山手廃寺にあり、酷似したものは寺戸廃寺F I、康徳寺廃寺Fである。寺町廃寺F I bは、大当瓦窯跡で出土しており、亀井尻瓦窯跡F・神門寺廃寺F Iが酷似している。

このF Iと類似しているが、やや文様構成の異なるものが神門寺廃寺のF IIと寺戸廃寺のF IIで、前者は凸中房に1+7の蓮子を配し、花弁と中房の間に珠文帯が廻っている。間弁は珠文帯まで伸びて花弁を区画している。後者は、中房が凹圏で囲まれているため、一見すると凸中房状にみえ1+4の蓮子が入る。花弁は先端が尖っており細凸線もこれにしたがって尖っている。2重圏のものと3重圏のものがある。水切は丸瓦取付部から大き



1.寺町廃寺 S I 2.寺町廃寺 S II 3.神福寺 F 4.康徳寺 F
 5.寺戸廃寺 F I a 6.寺戸廃寺 F I c 7.寺町廃寺 F I c 8.寺町廃寺 K
 9.神門寺廃寺 F I 10.神門寺廃寺 F II 11.大崎廃寺 S 12.寺町廃寺(軒平)
 13.亀井尻瓦窯跡付近(軒平)

図26 水切瓦集成図

く三角状に削られている。

また、水切は明らかに付いていないが、花弁の文様構成が類似したものに伝神福寺跡のFがある。中房は圈線で囲われた凹中房状で、1+5の蓮子をもち、花弁は細長く、間弁は中房までとどいている。周縁は斜縁に面違鋸歯文が付いている。重圈文系とは異なり複弁文類の祖形ではないかと思える。また、横見廃寺の複弁文は、花弁の形が異なるが他例と同様周縁は重圈が廻っている。1点のみ水切瓦を確認している。

素複混弁文類（K）一寺町廃寺と大当瓦窯跡から出土している。F I¹と同様の中房に素弁と複弁が交互に配され8弁となっている。周縁は珠文帯が囲み、一段高くなつて圈線状を呈している。

单弁文類（T）一明官地廃寺で最近出土したもので、いわゆる山田寺式の7弁文に水切がついている。明らかに備北の影響によるものであろう。

このように、いわゆる水切瓦は非常に特徴的な文様構成の類型の中で展開しており、大崎廃寺を除いては水切は範型とは関係なく、削って作られており、任意に削られたためであろう様々な形となっている。

以上、最近の出土例を含めて水切瓦の出土遺跡と瓦の様相を簡単に紹介した。寺町廃寺や栢寺廃寺、神門寺廃寺など、近年の発掘調査の進展によって大きな成果があり、水切瓦の問題も再検討すべき段階に至っている。

出雲・備後・安芸・備中と分布の範囲は大きく変っていないが、寺町廃寺のS Iと栢寺廃寺S Iの同範・先後問題、寺町廃寺と上山手廃寺の関係、横見廃寺・明官地廃寺への影響、神門寺廃寺F IIの位置付け等課題も多い。

今後こうした問題点を一つずつ解明しながら、水切瓦の用途・製作技法・年代・分布・伝播等の研究を進め、初期仏教文化の地方伝播の様相を明らかにしたいものである。

(松下正司)

註(1) 梅原末治「古瓦についての一、二の覚書」（史迹と美術22-8、昭和27年）

註(2) 近藤 正「備後寺町廃寺址と二三の寺院址に関する一つの試み」

（歴史考古1、昭和32年）

江谷 寛「吉備国出土の古瓦」（古代文化19-6、昭和42年）など。

註(3) 拙稿「備後北部の古瓦」（考古学雑誌55-1、昭和44年）

註(4) 拙稿「瓦の様式と伝播」（古代史発掘9、昭和49年）

拙稿「仏教文化の受容」（古代の地方史2、昭和52年）

三次市教育委員会『備後寺町廃寺』1~3（拙稿 各まとめ、昭和55~57年）